

南アルプス市立大明小学校関係者評価書

第1回 学校関係者評価委員会

- 1 実施日 平成23年8月25日(木) 午後4時30分～午後6時15分
- 2 会場 大明小学校校長室
- 3 参加者 学校関係者評価委員
石田敏枝 志村裕子 内藤守房
石川公司(委員長) 平岩正幸
学校職員
野田通男(校長) 杉山由貴子(教頭)
保坂廣樹(教務主任)

※この日欠席された 辻高廣 齊藤光章 両委員にはすでに意見をいただいている。

4 学校から提案された内容

- ① 学校経営について(校長)
- ② 学校の自己評価について説明
 - 教職員による自己評価(教務主任)
 - 児童アンケート(教務主任)
 - 保護者アンケート(教頭)

5 協議されたおもな内容

- ◎ 教職員による評価、児童アンケート、保護者アンケートについての考察

6 協議の場に出された意見

① 教職員による自己評価について

学校よりQUについての概要説明後、

委 学級の状態を知り、それへの対応を図るという意味でこの検査が重要なものだということがよく理解できた。

学 教師が長年の経験だけで学級や子どもを見ているだけだと、実態を見誤る可能性もある。客観的データという意味で、学級運営に役立てることができる。

学 QUの結果をどう読み取り、どう手立てを考えていくかを継続していくことで教師の力量もあがる。学級や子どもたちの変容を見ていくためには、年2回の実施が望ましい。本校では5月と11月の2回実施している。

学 教師が見落としている児童がデータとしてあがってきたとき、教師は自分の学級経営を振り返り、その児童に手を差し伸べることができる。

委 QUというのは、一人ひとりを見ていくことが可能な調査なのか。

学 学校でとる児童アンケートと同様、記名式なので、個に応じた指導につなげられる。

委 正直な回答ばかりだといいのだが・・・

最近の子どもたちは、考えがとても大人であり、校区探検等で見学に来て以前より大分ハイレベルな質問をする。本当に分かっているのかと思うこともある。

委 今の児童と昔の児童との決定的な違いは何か。

委 読み聞かせのボランティアとして本校の1年生に関わっているし、保育園等の子どもにも読み聞かせをするが、本質的に全く変わっていないと感じている。本に集中する子ども

もの姿は昔と変化ない。しかし、あえて挙げるとすると、がまんが出来ないこと・思いやりに欠けることなど挙げられるかもしれない。

学 少子化、核家族化の中で、やさしさを受ける機会はたくさんあっても、思いやりを伝える機会が少ないと感じている。また、昔の子どもとの決定的な違いというと、人間関係をつくること、言い換えるとコミュニケーション能力の低さというようなものがあると感じている。やはり、核家族化の影響か。

委 子供どうしの関係の中で、かげんが分からない子どもも多い。これも人間関係の希薄のせいかもしれない。

学 大人も近所づきあいを困難と感じている。大人の世界の子どもバージョンかもしれない。

委 AとBだけという評価は大変すばらしいと感じている。過去には、子ども達が荒れている時代もあったし、保護者と先生方との間で意見の調整に手間取った時代もあった。。

委 QUはクラスの間ドックのような感じを受けた。修繕が必要な箇所が見つければ、それに手立てを加えていくということだろう。これまでQUの結果と先生方のとらえが違っていたということはあるか。

学 クラスの実態というのはそれほど大きな違いはないと思うが、個々の児童についてのとらえには気づかなかった面もある。

学 名前が入っていることが大事で、これが、指導に生きる。

委 予算がかかることであるが、ぜひ続けてほしい。

学 学級経営が成り立っていくことが学習成果につながる。

委 指導要領が変わり、教科で教えるべき内容も増えたはずだが、教職員の教育課程に関する評価を見ると、ほとんどがAとBであり、先生方は本当によく努力してくれていると感じる。

学 アンケートには上がってきていないが、先生方の悩みはある。

学 外国語活動について、本校では、8月に市教委による研修を全員が受けて、外国語を先生も子どもも楽しむという考えで行っている。

学 大明小学校では、5・6年だけでなく、1~4年生も月1時間ぐらいで外国語に親しんでいる。5・6年になって急に始めるわけではない。コミュニケーションを図ること、外国語に耳からなれることに力を入れている。

② 児童アンケートについて

委 アンケートの質問項目「学校は楽しいですか」「学校に行きたくないときがありますが」などの結果を見ると、多人数学級の4，5年生のほうが，1，2年に比べてよい結果が出ているように思う。多人数ということにさほど問題はないのだろうか。それとも、大明小として、多人数学級に対するフォローをきちんとしているからなのだろうか。学校経営の説明であったようなティーム・ティーチング指導が効果的に機能しているためと考えるとよいのか。

秋田県では、県全体として少人数教育（30人学級の推進）を図っている。また、教科ごとのスーパーティーチャーをおいて、きめ細かい指導をしている。このような取り組みは、県レベルで推進していただきたい。また、市へも働きかけていきたい。

学 山梨でも今年度ははぐくみプランを小3まで拡大し、他県より一歩進んだ取り組みをしている。また、南アルプス市では市単講師を大勢配置してくれている。きめ細かな対応につなげることができ、本当に有難く、今後の継続配置を望む。

委 また、適応指導教室ウィングの設置など不登校問題への対応にも力を注いでいる。

学 家庭的な部分で困難を抱える児童がいるが、子育て支援課とも早期の連携がとれ、それぞれの役割の中で見守っていける体制が整っている。

③ 保護者アンケートについて

委 保護者アンケートに「ゆとり」がなくなったと書いてあるが。

学 担任も子どもと接する時間が少なくなったと感じている。

委 保護者も感じているという結果が出ている。学習の時間数が増えたってことなのでしょうか。

学 ゆとり教育と学力重視、学力重視へ大きく舵を切ったために現場は非常に忙しい。

委 地域に帰ると、児童の挨拶があまりうまくないという意見があるが、子どもは大人があいさつすれば何らかの反応をしてくれる。子どもの挨拶がないということは、大人の声かけが圧倒的に足りないことの証だと思われる。

委 最初は返ってこなくても、あきらめずにあいさつをやり続けることが大事。

委 地震に対する意見が保護者アンケートには見られる。

委 「地震が起こったときどうするか」を自分で考えることが出来るような主体性を持った防災教育の必要性が叫ばれている。今度の地震で、「親じゃない・兄弟じゃない・一人ひとりが自分で考え行動する」という意味の「てんでんこ」という言葉が見直された。

学 個人の危険予知能力を高めるという意味の防災教育は、現在交通安全の指導の場でも盛んに言われる。個人の力を高めるということが防災教育の中で今後ますます必要になってくる。

児童引渡し訓練における保護者の態度も一考したい。とくに今後子どもと共に話し合っておくべき注意事項については、ぜひ取り組んでほしい。防災教育は、学校も家庭でもますます重要度を増している。

④ 今後の課題

○QUの実施、市単講師の配置など、本市独自に予算を割いて児童一人ひとりへのきめ細かい対応を可能にしている事業について、現場で大きな成果を挙げていることをあらためて感じた。今後の継続が図られるように希望する。

○3. 11以降、防災に関する保護者の関心は高まっている。学校の地震対応マニュアルの早期の周知と、個人として主体的に動けるような防災教育の必要性

○あいさつなど大人の側からの働きかけが子どもたちの行動につながることを一層

○アンケート結果を活用したり、日々の指導や対応を通じて、学校と保護者が連携しながら児童の教育に当たれるよう、よりいっそうの信頼関係づくりを図っていきたい。

評価書作成責任者

関係者評価委員会委員長

石川 公司